

銅像、肖像画、建築など

小泉順也

銅像、肖像画、建築は大学の歩みを今に伝え、キャンパスに魅力と彩りを添えています。これらが作られた経緯や担っている機能は多様であり、本来であれば別個に論じるべきでしょう。それでも、これらをまとめて呼ぼうとすれば文化財という言葉が頭に浮かびます。一九五〇年に施行された文化財保護法には、文化財の定義が明記されています。少し面倒ですが、改正を重ねた現在の条文の一部を引用すると、建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書などの「有形文化財」、演劇、音楽、工芸技術などの「無形文化財」、その他に「民俗文化財」「記念物」「文化的景観」「伝統的建造物群」といった大まかな分類が挙がっています。文化財は国や地方自治体はその価値を判断・評価し、指定するという制度に支えられています。選別された

ものだけを公共のために大切に保存し、適切に活用を図っていくという訳です。

指定制度は有効に働いている面もありますが、既存の基準やカテゴリーから漏れてしまうものも少なくありません。つまり、現在の価値体系や枠組みの外側にあるものを拾い上げる制度にはなっていないのです。こうした問題意識が共有されるなかで、二〇〇〇年に「文化資源 (Cultural Resources)」の名前を冠した専攻が東京大学大学院人文社会系研究科に設置され、二〇〇二年に文化資源学会が創設されました。近年の学術的な動向を踏まえ、潜在的価値を有しながら着目されていないモノや現象への豊かなまなざしを呼び起こすため、今回の公開講座を「文化資源としての一橋大学」と名付けました。



図一 荒井陸男《福田徳三先生》(修復後)
一橋大学附属図書館

文化財という観点から見れば、一橋大学の兼松講堂、旧門衛所、東本館は二〇〇〇年に国の登録有形文化財(建造物)に指定されました^①。また、木下昌大建築設計事務所が設計した機能的でシンプルなデザインを備えた空手道場は、国立キャンパスに新たな風景を生み出しました。この建物は二〇一二年のグッド・デザイン賞を受賞し^②、一橋大学に対する従来のイメージに小さな変化をもたらしました。ときにゆっくりと、ときに大胆にキャンパスは変化していきます。

建物の改築や新築は今後も出てくるはずですが、既存の肖像画や銅像に新たな仲間が増える見込みはないでしょう。現在、



図二 宮本三郎《中山伊知郎先生》(修復後)
一橋大学附属図書館

一橋大学は約四〇点の肖像画に加えて、レリーフも含めると約二〇点の銅像・彫像を所蔵しており、教鞭を執られた先生方は姿を変えてキャンパスを見守っています^③。最近、本学の肖像画には大きな変化がありました。荒井陸男(一八八五—一九七二)による福田徳三先生(一八七四—一九三〇)の肖像画(図一)、宮本三郎(一九〇五—一九七四)による中山伊知郎先生(一八九八—一九八〇)の肖像画(図二)が、二〇一五年三月に修復を終えたのです。埃や鳩の糞で汚れていた画面や裏側は見違えるほどきれいになり、亀裂を補彩し、画布の張り具合を調整することで表情も和らいだように思います。現在、今後の

活用方法や修復計画については検討を続けています⁽⁴⁾。

本来は肖像画にせよ銅像にせよ、作者や像主を知らなければ、その面影を受け止め、そこにある内実を捉えることはできません。しかし、断片的な情報を与えられただけでも、無味乾燥に見えていたものが生き生きと動き始め、雄弁に語りかけることがあります。たとえば、東キャンパスの東本館の近くに、海運学の創始者である堀光亀先生（一八七五—一九四〇）の銅像が置かれています（図三）。その口髭をたくわえた姿は、東京美術学校で学んだ石河光哉（いじくみや）の筆によって肖像画にも描かれました（図四）。頬や額に刻まれた皺、正装で白手袋を右手で握った様子は、いくらか緊張した面持ちを伝



図三 渡辺弘行《堀光亀先生像》
一橋大学

えています。実は苗字は違いますが、作者の石河は像主の堀の実弟でした。学問と芸術という異なる道を歩んだ兄弟は、肖像画を通して今も対話を続けているのです。

今回は直前に題目を変更し、「など」を付け加えました。それは最後に立て看板を取り上げたいと考えたからです。従来のは立て看板はベニヤ板にペンキを用いて描いたものですが、メッシュターポリンと呼ばれる丈夫なポリエステル織物に印刷したものを紐で括り付けた運動部の看板が、二〇一四年頃から少しずつ目立つようになりました。これは写真を取り込むことが可能な媒体で、屋外での設置に適しています。しかし、私が見たもののなかで最も好きな立て看板は、二〇一二年に第一六回



図四 石河光哉《堀光亀先生》
一橋大学附属図書館

小平祭実行委員会が作成した「チャリ撤去」です。図版では分りにくいですが、赤い文字は周囲を白く塗りつぶした後の塗り残しです。つまり、これは地と図を反転させており、コントラストの効いた配色と手形を加えた構図によって印象的なデザインを生み出していました。

これまで述べてきたことは取りとめのない指摘かもしれませんが、それでも、こうした情報を頭の片隅に留めたならば、キャンパスの見方は変わってくるはずです。文化財や美術品に限らず、普段は意識しないものにも思いがけない視点や背景が潜んでいます。ふと歩みを止めてあたりを見まわし、わずかに聞こえる声に耳を傾けてみたとき、これまでとは異なる風景に気がつくでしょう。そこにあるのは、「文化資源」と名付けられるような一橋大学の新たな側面なのです。



図五 第16回小平祭実行委員会「チャリ撤去」
2012年5月31日撮影

- (1) 「文化遺産オンライン」に一橋大学の情報も掲載されています。<http://bunkanhi.ac.jp/>
(最終アクセス、二〇一五年九月二十五日)
- (2) <http://www.gmark.org/award/describe/3939/> (最終アクセス、二〇一五年九月二十五日)
- (3) 数点の浅れはありますが、以下のサイトに一橋大学の「学内肖像画・銅像等コレクション」がまとめられています。<http://www.hi-u.ac.jp/guide/outline/portrait.html> (最終アクセス、二〇一五年九月二十五日)
- (4) 大学の肖像画、銅像・彫像を活用した事例を挙げます。木下直之編『博士の肖像画——人はなぜ肖像を残すのか』(展覧会カタログ)、東京大学総合研究博物館、一九九八年。図録

は作成されていませんが、最近では早稲田大学で肖像画の展覧会が開催されました。「早稲田の名士たち」早稲田大学會津八一記念博物館、二〇一五年九月四日—二〇一六年一月二十八日。

(こいずみ まさや／言語社会研究科准教授)